



時は高く、蒼天の地に沈みけり

たまゆき

何とも醜い生き物がいる。

その種族に付けられた名は「辺土（りんぼ）」。

土から産まれる化け物。

しかしその外見とは違い、内面は誠実で聡明。

土の中の微生物を栄養として生きている。ある程度の大きさに成長すると体を分裂させ、増える。性別は無く、個々が自由に体格などを選んでいく。

寿命は生活環境によって大きく変わる。寿命などあつてないようなもの。自ら望まなければ死は訪れない。

美しい人間の女がいる。

名は「ユパリ」。

白い肌に栗色の髪が艶かしく、その香りはあまやかで心地よい。

きれ長の目で、薄い笑みを作る。

山奥の村に生まれ、その村の青年に嫁ぎ、翌年には懐妊したが、直ぐに子は流れた。

ユパリはそれ以来崩れ始めた。

居もしない赤ん坊を抱くふりをしたり、ブツブツと独り言を言ったりするようになった。

村人も家族もユパリを白い目で見、近付かなくなった。

ユパリの唯一の話し相手は、辺土の若者だった。

若者はユパリに懐いていた。

青年の名は「イカイ」。性別は男という事に決めていた。

村の外れに辺土達の暮らす沼がある。辺土は村人の手伝いをして暮らす。

そして村人は水に触れられぬ辺土の代わりに、沼地の手入れをしてやる。沼地の水は少なすぎても、多すぎてもいけない。

それがこの村に伝わる古くからの姿。

「ユパリ、今日は何をする？」

「今日はお池までお散歩しましょう。だってお天気がいいんだもの。」

「じゃあそうしよう。」

ユパリは履物をわざとぺたぺた鳴らして歩いた。イカイは下半身を地面に埋めたままで、ぬらぬらと移動する。

村の外れ、西に池がある。決して大きくはないが、季節になれば花が咲き、鳥

たちが羽を休める心地のよい場所だ。

「イカイ、水には気をつけてね。」

「分かっている。近付かないよ。」

辺土は体を泥で形成している。ある程度の水分は生命維持に必要な不可欠ではあるが、多すぎる水は体を分解してしまい、逆に生命を危険に曝す。勿論、乾きも天敵である。程よい湿りを保つ必要があった。

二人は池の見渡せる小高い丘の上で腰を下ろした。

「綺麗だね、イカイ。」

「うん、綺麗。」

「イカイは水に入れなくて残念だね。」

「そうだね、人間だったらよかったね。」

「そんな事ないよ。私はイカイが好き。人間じゃなくていいよ、ただ水に入れなくて残念なだけ。」

「そっか、そうだね。」

「人間でも水に入れない人はいるけどね。」

「溺れるのは怖いからね。」

「私も深いところは怖いなあ。」

「俺は溶けちゃうなあ。」

互いに顔を見合わせた。

「うふふ。お茶にしようかな。今日はお菓子持ってきたの。いただきます。」

ユパリは大きな口を開けて、菓子を頬張った。綺麗な顔に似合わず豪快な食べ方をする。顔の筋肉を総動員させ、くっちやくちやと飲み込んでいく。

「ユパリは美味しそうに食べるね。」

「美味しいもん。」

「いいね。」

「食べてみたいの？」

「うん。違うよ、ユパリが食べているのを見ているのが好きだけ。」

「……人間の食べ物食べたらどうなるの？」

イカイを見つめながら尋ねる。

「別に。どうにもならないよ。ただ土の中に埋めているのと同じだと思って。俺自身、味とか感じないしね。」

「そっか。」

「食べる楽しみっていうのがあるのは良い事だね。」

「そだね。」

言いながらも一つ口の中に投げ込んだ。イカイは体を二の腕の辺りまで土に沈めて微生物を取り込んだ。

「気持ちよさそうね。」

薄笑みを浮かべたユパリ。

「わかんない。感覚無いから。」

「そっかあ……。」

少し寂しそうに眉根を寄せた。

ユパリは村人に疎外された存在。イカイはユパリに付き合い、日がな一日二人で野山を散策している。

日が暮れば家に帰り、夜を過ごす。

「夜も一緒にいられたらいいのね。そしたら悲しくならないよね。」

「うん、そうだね。」

山の上を飛ぶ鳥の編隊を目で送った。

「私の事好き？」

「好きだよ。」

「そっか、よかった。」

ユパリの横顔にイカイはモヤモヤとした気持ちになった。

ユパリの悲しみも孤独も、本当は少しも癒えたりしないのではないだろうか。

彼女を救えるのは死んでしまった彼女の子供だけなのでは？

そう考えると堪らなくなった。

そしてそういう思いに駆られた時はついつい沈黙してしまう。

ユパリはユパリで、こういう時は決まって失った我が子の事に思いを馳せているのだ。沈黙しながら。

そして次に出る言葉は、

「私の赤ちゃん、赤ちゃんね、死んじゃったのは分かってるの。」

「……うん。」

「でね、赤ちゃん死んじゃって、お腹から出た時に私の体の一部も、内臓のどっかも一緒に持っていかれちゃった気がするんだ。」

「……うん。」

「だから私どっか死んじゃったのかもしれない。私どっか足りないだよ。」

ユパリは少し子供の様に喋る。それはその様な喋り方しか出来ない訳ではなく、

言葉を喋っているというより、気持ちのみで言葉を発しているからであった。

相手に伝える事より、自らの心の内を表現する事を優先しているとも言おうか、純粹な気持ちの現われなのである。

「死んじゃったのは分かっているけど駄目なんだ、時々分からなくなる。何で赤ちゃんがここにいないのか分からなくなる。そう言う時、凄く抱きしめたくなくなるの。」

「赤ちゃんを……。」

「そう、私の赤ちゃん。何処かにいる気がしちゃうの。ただ私が産んでないだけで何処かにいるんだって……おかしいね。こんなの。」

「そんな事ないよ。」

そんな、慰めとも誤魔化しとも付かない曖昧な言葉しか返せない自分がもどかしい。

初めての子を流産し、その上今後も子は望めないと医者から言われた事がきつ

かけて舅、姑がユパリを役立たずだと言う様になった。夫は庇いもしなかった。ユパリは孤独から逃れる為に居もしない赤ん坊に縋った。結果、更なる孤独が彼女を待っていた。

イカイにはどうする事も出来ない。そしてその事が彼を苦しませる。何も臆する事なくユパリを心から励ます事が出来たらどんなに素晴らしいだろう。しかし自分は辺土。醜い存在。

自分は無力で、ただの土人形にすぎないと思い、心を痛めていた。

日が傾き始めた。もう直ぐ夜が来る。

二人を引き裂く夜が。

夜は美しい。荒れ狂う昼間とは違い、夜は全てを沈めてしまう。

孤独の為に夜はある。

「なあ、ユパリ。おれはそうする事が一番いい様に思うな。」

「そうですか。」

ユパリの夫、ツツガは妻に詰め寄った。

農家の長男で、これといって顔が美しい訳でも、稼ぎがよい訳でもない。ただツツガの方が、美しいユパリを妻にすれば自慢の種になるからと縁談を申し出ただけであった。

ユパリの両親は、確かに娘は見目麗しいが、どうにも一切の家事が苦手で、一人では満足に飯も炊けないのだから、嫁ぎ手は無いかも知れないと勝手に思い込んでいた。だから相手がどんな男であらうと申し出てくれた人を断る事はしなかった。

ユパリは嫁ぐ男が誰であるか知らぬまま、結婚当日を迎えた。

何も特別な事はない。女は男の道具であるとされる土地であったから、それは寧ろ普通の事であった。

「なあ、俺のいう事が聞けないなんて事はないよな。」

「ええ、勿論です。」

夫の事を愛しいと思つた事など一度もない。

拒む事も許されず、陰惨な思いで日々を送つていたところだった。

そこへ夫が丁度よく離縁の話を持ちかけてきた。

恐らく、世間体や両親の事があるのだろう、とユパリは思った。そして、願つ

たり叶つたりとは正にこの事。

「そうか、では早速明日にでも。」

「はい。かしこまりました。」

ユパリは快く頷いたのだった。

だがしかし、実家に帰る事は許されない。

離縁された女は村にいてはいけない決まりだった。

村の南にある山を一つ越えると、小さな集落がある。そこで暮らす事になるのだ。

其処には同じく家を離縁された女、夫を亡くした女、嫁ぐ前に男に体を許した者、罪人の妻、娘、そういった者達が集められていた。

「辺土のイカイを連れて行つてもいいですか？」

「ああ、いいだろう。是非そうしなさい。辺土の長には俺から話をしておいてやるよ。まあ、辺土は縛られぬ生き物だから反対はされまい。」

「有り難う御座います。宜しくお願いします。」

ユパリは深々と頭を下げた。

あくる日の朝、ユパリとイカイは村を離れた。見送る者もなく、生まれ育つた故郷との静かで悲しい別れであった。

村人の事は好かずとも知つた土地を離れるのはやはり寂しいものである。

山を越えた集落へは女の足ではどんなに早く歩いても二日はかかる。途中の道は整備されておらず、その為集落に着く前に事故で命を落とす者も少なくはない

そうだ。

時々山に入った村の者が、無残な姿の女の屍を見つけた事があった。

「そんなに急いじゃ駄目だよ。」

「はあい。」

危険な山道だ。だがユパリは生き生きとしていた。

村を出てからが、自分だけの本当の人生の始まりなのだ、と出発間際、イカイに言っていた。

ユパリはその通り、すっかり別の人生を楽しんでいる様だった。

「ねえ、イカイ。」

村が見渡せる程の高さまで山を登った時、先を歩いていたユパリがくるりとイカイの方を振り返った。

「なに？」

「お願いがあるの。」

「お願い？」

ユパリの顔にはあの薄い笑み。

「うん、お願い。」

ユパリの笑みは幻の様だ。笑む程に彼女が遠く、消え入りそうになる。実体が掴めなくなる。儚く、それでいて美しい。

「俺に出来る事ならいいよ。」

イカイも笑った。

「取って来て欲しいものがあるんだ。」

言って、見下ろした村を指差した。

「守り神様、取って来て。」

イカイは固まってしまった。ユパリの言わんとしている事が全く理解出来ないでいる。

「どういう……事？」



「だから“命の花”を取って来て。」

命の花―古より村に伝わる御神体。

尽きることの無い命を産むとされ、この守り神の加護により村は豊富な自然に満たされていると言われている。実際、この村には大きな災いが起こる事もなく、田畑も立派に育ち、水も枯れない。

ユパリが何故、命の花を欲しがるのか皆目検討がつかないイカイだったが、彼女のためならと思ひ、つつい領いていた。

「夜になるまで待とう。そしたら行ってくるよ。」

「ありがとう、イカイ。」

二人は夜まで森の中に身を隠す事にした。

辺土は人も獣も決して通る事の出来ない道を行く事が出来る。イカイはユパリを背に乗せ、その道を進んだ。

「凄いのね！殆ど垂直よ、ここの崖。こんな所に来る事が出来るなんて本当に凄

いわ。」

「あまり動かないですよ。間違っても落ちない様にね。」

「はあい。」

崖を上がりきった場所に、畳二畳程の広さの平らな場所があったので、そこへ腰を下ろした。

「山が真っ赤ね。」

辺りの景色を見ながら呟いた。

秋も終わりとあって、山の紅葉は真っ盛り。

「ああ、まるで燃えているみたいだ。」

やがて日が傾き、熟した太陽が世界を彩ると、山々は更に赤みを帯びた。

炎の塊によって照らされているにも関わらず、日の当たる景色には、火炎の持つ凶暴性が微塵も感じられない。ただ暖かく、ただ優しい。

そして訪れる闇。休息の時。

「日が落ちたね。行くの？」

「いや、まだ。もっと深夜にならないと。村の人に見つかったら大変な事になる。」

「そっか。……少し暇だね。」

「そうだね。」

「お腹が空いちちゃった。」

「お弁当は？ 持って来たんでしょ？」

「お昼に食べちゃった。」

「あ、そうか。じゃあここで待ってて。」

するすると崖を下りて行く。

「何処に行くの？」

「木の実を取ってくるから少し待ってて。動いちゃ駄目だ。」

イカイはあつと言う間に見えなくなってしまった。

ユパリは仕方なく、夜に光る星を眺めた。

一刻以上経ったがイカイは戻らない。ユパリの不安と孤独は限界に達していた。恐怖に怯えるが、泣くに泣けない。泣いてしまえばイカイが二度と戻らない気がした。

そうだ、戻ってくる。戻ってくるのだから泣く必要なんてない。

泣けば諦めが芽生えてしまう。それは嫌だ、諦めたくない。必死で自分に言い

聞かせた。

辺りは益々暗くなり、星は一層濃く輝いた。

自分の体が闇に紛れて消えてしまう錯覚を覚える。

「ごめん、ただいま。」

はっと気付くと暗闇の中で土の塊が蠢いた。イカイだった。ユパリは言葉も無く泣き出した。

「ごめん、ごめんね。なかなか良い実が見つからなくて。」